乳癌に対するセンチネルリンパ節生検の成績

吉永　康照[1)]　　平塚　昌文[1)]　　馬場　美樹[1)]
別府理智子[1)]　　前川　隆文[1)]　　川原　克信[1)]
白日　高歩[1)]　　藤光　律子[2)]

福岡大学第二外科[1)]，放射線科[2)]

要約：乳癌手術での腋窩リンパ節郭清は，予後推定，補助療法の決定と局所の制御手段とみなされているが，組織学的リンパ節転移陰性症例に対してはむしろ弊害となっている．センチネルリンパ節（SLN）生検は，術前あるいは術中にリンパ節転移の有無を調べる手技である．1999年6月から2002年1月までに福岡大学第二外科において手術を行った初発乳癌症例の内，T1-2N0-1M0 の47症例を対象として色素法と RI 併用による SLN 生検を行なった．色素法は39例，同定率は74.4%だったが，後期の19例では94.7%に上昇していた.敏感度は66.6%，特異度100%，正診率は96.6%．RI 併用法は8例，同定率は100%，敏感度80%，特異度100%，正診率は87.5%であった．術中迅速病理診断は18例に行われ，敏感度50%，特異度100%，正診率は83.3%であった.今後病理医と放射線科医と協力して，十分なインフォームドコンセントのうえで早期乳癌（T1N0）に対して SLN が転移陰性の場合，腋窩リンパ節郭清の省略も可能と考えられた.

索引用語：乳癌，腋窩リンパ節郭清，センチネルリンパ節生検